

剰 余 生 産 物

野 崎 氏 隆

はじめに、たんなる剰余物としての剰余生産物の発生の歴史を、つぎに、その形態規定性を、最後に、剰余生産物概念の展開をこころみる。

剰余生産物は、文明史においてさらに重大な規定をうけとる。搾取と収奪とがそれである。だが、この検討は別稿にゆずる。

本稿において明らかにされることは、剰余生産物が、歴史と社会構成体のいかんをとわず、つねに、社会の発展の物質的基礎であるということの承認のうえで、にもかかわらずそれが、同時にあるひとつの歴史時代の衰滅の契機でもあるということを論証すること、である。

第三節についてひとことのべておく。ヘーゲルは、たしかにマルクスの指摘したように、「実在的なものを自から運動する思考の結果としてとらえる幻想におちいったのであるが」しかし、いちど、諸範疇の運動を、現実の行為として組み立ててみることは、鈍麻した意識にとってはいい反省の機会であろうし、また上記の目的のためにひとつの方向を与えてくれる。

§ 1. 歴 史

剰余生産物という以上、それは人間が生産活動の一環として行う労働から生れる具体的な物、であることはまちがいない。その「物」を、そのままのものとしてとらえて、ここでは「たんなる剰余物としての剰余生産物」と呼ぶが、このようないわば即自的な剰余生産物⁽¹⁾が社会的に存在した、もしくは存在しえたのはどのような時代かを考えてみよう。人類の古代史は多くの場合、大きく野蛮と未開の時代に分けられている。これは、採取労働と定着労働を主な指標にしたり、採集産業に生産産業または加工産業

を対比させたりしたごく大ざっぱな分類である。同様な2分類でも、L. H. モルガンが行ったように、もっとこまかな文明状態との照応によって、この両時代をさらに小さく、前期、中期、後期と分けるのもある。⁽²⁾ この2分類法にしても、より詳細に見れば年表的にはかなり大きくいちがいがあるようである。がしかし、それは地質学者や考古学者の仕事であって、われわれはそこまであれこれ吟味する必要はない。モルガン自身が、人類の生存期間を10万年と仮定したうえで「10万年というのは長いかもしれないし短いかもしれないが」と挿入句をはさんでいるくらいであるから。ただ、ここで人類の原始の時代にふれる理由をひとこと言えばそれはまず、『ドイツ・イデオロギー』が「前史」について与えた忠告であり、そして、「どうしてこの前史のナンセンスから本来の歴史へは行っていくか」を明らかにすることが、本稿にとって最低限度は必要であると考えるからである。そこで、便宜的に、モルガンがとった時代区分の文明指標を見てみると、その境目にあたる野蛮の上層状態を「弓矢の発明」に、次の未開の下層状態を「製陶技術の発明」にしているのである。「弓矢の発明」ということは、それまで、燧石 (flint, ついせき, すいせき) や石器しかもたない人間社会における驚くべき生産手段の発明、改善だった。この狩猟の新道具は、生産手段であると同時に武器でもあった。⁽³⁾

エンゲルスは『自然の弁証法』の中で、人間の真の人間化の過程を次のように述べている。「食用植物の種類がますますふえ…食物がますます多様となり、またそれとともに体内に摂取される(植物的)物質…が多様になっていった。しかし、こうしたいっさいもまだ本来の労働ではなかった。労働は道具の製作から始まる。では、最古の道具とはいったいなんであろうか? それは狩猟と漁撈の道具であり、前者(つまり弓と矢だ)は同時に武器でもある。ところが狩猟と漁撈とはたんなる植物食から、植物食と肉食との併用への移行を前提とする」と。(引用中の()は筆者) 燧石したがって火の使用は、モルガンにおいては野蛮の中期の指標である。火の使用と、はじめのうちは、魚肉、ついで弓矢の発明によって急増したであろう獣肉との組合せによる摂取が、人間の体力と自立性、さらに決定的に

は脳の発達におよぼした影響の甚大さは、周知のことである。さて、弓矢という生産手段の発明は、このような重大な生活条件の、ひいては人間自身の変化・発展に寄与したのだが、もういっぽうの、未開時代の入口、つまり未開前期の開始をつける「陶製技術の発明」について考えてみよう。モルガンは、この「発明」を文明指標に用いながら、あまり重要性を認めていないのである。⁽⁴⁾

では、なぜ、彼は、古代史を大きく真っ2つに分けるこの重要な境目に、彼自身それほど重要とっていない「発明」をもってきたのか？ たしかに、『古代社会』第1章後半は、技術史的観点が色濃く出ており、そのためにこの「発明」の評価も十分にはなされなかったように思われる。モルガンはその「発明」自体について、「(野蛮と未開の)境界を定めるべく選ぶ最も効果的かつ決定的試金石〔the most effective and conclusive test〕」また、それを試金石として用いた理由として「(その発明は)生活の改善および家庭生活の便益の増進にむかって人類進歩の上に新紀元を画したのであった」⁽⁵⁾と、いわば最上級の表現を使ってはいるが、残念ながら、その効果的かつ決定的である点を、示そうとして示していない。土器をメルクマールとする時代把握の好例として、われわれは日本の歴史の中に「縄文時代」と「弥生時代」というものをもっている。両時代を区分するために利用されるのが、いうまでもなく、縄文式土器と弥生式土器である。『社会発展史』(犬丸義一・山田敬男, 学習の友社, 1977, 以下, 発展史)は、紀元前2, 3世紀から紀元3世紀ごろまでを「弥生時代」と呼び、「日本も生産経済に移行する」と教えている。(p. 41) もっとも、『発展史』は、弥生文化の指標として弥生式土器をあげているわけではない。「縄文時代は水田農業を開始する弥生時代へと発展し」「農耕と金属器、とりわけ水稲と鉄器の導入によって生まれた新しい文化を弥生文化」と呼ぶ、(p. 41)と教えているのである。『発展史』の生産経済とモルガンのいう未開時代とに、土器が登場することはたんなる偶然かもしれない。土器の良否ましてや文様の巧拙を云云することは、考古学にとっての重大事かもしれないが、われわれにとっては正しく「前史のナンセンス」に過ぎ

ない。『発展史』が、わずかに「縄目のついた土器」(p. 38)とふれたにとどめたことは、さすがと言える。だが、『発展史』が、「前史のナンセンス」におちこまなかったこと、したがってまた、この重要な時代の境目にたしかに登場した土器の意味をさほど重視しなかったことが、実は次の文章によって、土器の製造についてモルガンやエンゲルスの影響をそっくり継承しているにすぎないためではないか、と思われるふしもあるのである。『発展史』は「当時の日本人がものの化学変化を利用しはじめていたことをしめしています。土器の製造によって食物を煮て食べるようになり、食物の範囲はひろがり、消化もよく、調理も衛生的になります。このように縄文土器の出現は日本列島の歴史に大きな発展をもたらしました」(p. p. 38, 40)と述べているのである。にもかかわらず、これほど平明に日本の古代史にふれながら、モルガンの技術史的な視点のせまさを超えるものをもっていることを見逃すことはできない。それは『発展史』第2章第6節の極めて簡単な一句である。新石器時代にはいり、労働用具の改良や自然環境の変化につれて、人類の活動が活発になると述べたあとに「このような新しい採集活動の発展のなかで、大量処理の必要から土器がつくられるようになりました」(p. 38, 傍点筆者)とある。いったい、この「大量処理の必要」とはどういうことであろうか？ それはたとえば、これまで1立炊きの釜でごはんをたいていたある家庭が、家族がふえたために2立炊きの釜が必要になった、といった意味では決してないだろう。そうではなくて、それは、次第に生みだされはじめる生産物の余りものを、たくわえる必要である。その余りものが恒常化されるにつれて、陶製技術も完成されていく。日本における弥生時代が、水田農耕による剰余生産物の生産に裏付けられて、そこに生産経済の出発点がおかれ、そしてそこに弥生式土器があったというわけである。

土器を、剰余物のたくわえという観点でとらえることはそれほど独創的な、または突飛なことではない。⁽⁶⁾

もちろん、モルガンが、エンゲルスが、そして『発展史』が言うように、食べ物を、衛生的に、消化よく、煮て食べるという実際的な効用があった

ことは疑いえないし、そういう側面での「生活の便益」の増大ははかりしれないものがあったであろう。しかし、この土器を、たんに「食物を煮沸するための耐久的な容器」と見るか、「大量処理の必要」容器と見るかは、それにたいする評価のわかれ目である。前者は、それを現代生活にあてはめればわれわれの茶碗や鍋釜と見ることであり、後者は、それを、在庫⁽⁷⁾——その内容が生活資料であれ生産的資財であれ——形成のための、いわば、倉庫と見ることである。茶碗や鍋釜は、手から口への直接の消費、自然的欲望充足の進歩を裏付けはするが、それ以上のものではない。しかし、倉庫は、そこにたくわえる物の存在、剰余物の生産、さらには次期生産のための蓄積をさえ明示する。

以上の分析からわれわれは、古代史の2つの区分が、剰余生産物の発生ないし漸次の増加と、その生産の恒常化という点に着目してなされていることを知るのである。

剰余物が発生し、若干なりとも増加していく時代とは、わが国でいえば縄文時代に相当するだろう。さきにふれたように、『発展史』は「大量処理の必要」による土器製作の視点を示しながら、なお「一時的に大量の獲得物はあっても、剰余生産物を蓄積するまでの生産力の発展を生みだすことはできませんでした」(p. 40) とのべ、さらに、神奈川県平坂貝塚出土の人骨の医学的調査が、その古代人骨に極端な栄養失調を認めていることから、「縄文時代は……いぜんとして飢餓とのきびしいたたかいを必要とする低い生産力段階」(p. 40) にあったことを教えてくれる。『発展史』の指摘を概括すれば、この時代は自然的条件に全面的に支配される、不定期で偶然的な剰余物発生⁽⁸⁾の時代と言えよう。

「狩猟や漁撈を行なう野蛮民族は……非常に貧しくて、ただ物が足りないというだけで、その老若者や長引く病気で苦しんでいる者を、時には直接に殺し、また時には飢死にゆだね、もしくは野獣の貧り食うにまかしておく必要に間々迫られるほどである」(竹内謙二訳) とは、A. スミスの描写するところである。

これは悲惨そのものである。しかしこの悲惨は、人間が自己の生そのも

の生産の目的とし、そこで取得しうる剰余物の絶対的少なさによって起る悲惨さである。それに対して、たとえば江戸時代から明治のはじめ⁽⁸⁾にかけて、かなりの規模で行われた「間引」の風習や、昭和元禄の時代の子殺し、親子心中、姥捨、飢死の悲惨は、人間が生産を目的とし、生産が富を目的とするときの剰余物の収奪にもとづく悲惨である。

- 1 この表現は論理的ではないかもしれない、なぜなら、それはすでに剰余という規定性をうけとっているものであるからだ。それはともかく、剰余生産物概念は時代を経るにつれてますます複雑に規定されていく。それはあとで触れることになるが、たとえば、マルクスが『剰余価値学説史』のなかで、ガニルの富の理論をとりあつかって、そこで「資本主義的生産の目的は、剰余であって生産物ではない」と述べているあたりを理解するためにも、この概念の推移ということを念頭においていなければならない。ヘーゲルの、直接的な無規定的な最初の「有」でさえ、無規定性そのものが有の質を構成するから、この最初の有も即自的には規定されたものになる、というほどの意味に解してもらいたい。
- 2 ついでに言えば、その他にも、ドイツの歴史学派の有名な5段階説や、取引方法に着目しての段階説、また、ゾンバルトの分類などがあるが、こちらの方はいわゆる国民主義、生産力主義そしてまた倫理的傾向の強さのためか、あまりに考古・地質・人類学的実証性——実際のところそうたくさん資料があるわけでもないのだが——に欠けているように思われる。
- 3 武器とはいえ、たとえば共向体間の戦いによって、食に供する人肉を手に入れたり、またはかなり後の時代になって、労働力としての人間を捕虜という形で獲得するための手段であったとすれば、それはもはや武器というより、生産手段というべきかもしれない。もっとも、これは、紀元前1万年の話しであって、太平洋戦争が資源と販路確保という経済的側面をもったからといって、生産的であったなどとは、冗談にも言えない。しかし、つい最近、「戦争でもなければ…」と、つい本音を吐いた人物がいたが、こういう種類の人は、案外、この冗談にも言えないことを真面目に考えてそう言っているのかもしれない。
- 4 “the use of pottery is less significant than that of domestic animals, of iron, or of a phonetic alphabet, employed to mark the commencement of subsequent ethnical periods”
(L. H. Morgan, *Ancient Society*, 13, Meridian Books, U. S. A., 1963.)
- 5 2つの「 」内引用の邦訳は、青山道夫氏訳、岩波文庫、*古代社会*、上、31、36である。但し、第1の〔 〕内に示した test を、青山氏は「標準」と訳されたのを勝手に「試金石」とした。その理由は、第1に、すぐあとにでてくる

critterion と区別した方がいいと思ったこと、第2に、「土器の発明」を指標として用いることに、モルガン自身はかなり慎重であったことがうかがわれること、である。なお、引用中の（ ）および傍点は筆者。

- 6 “they must have kept the milk in earthenware pots, for they had pottery…”

“their grain, they roasted, ground between stones and stored in pots, to be eaten when needed”

(H. G. Wells, The outline of history, 1930, 84.)

- 7 ここで言う「在庫」とは、生産物のある部分が、「商品在庫」を形成することなしに、直接、在庫の生産手段または生活手段となる場合である。
- 8 「間引」は、本来ひそかに行なわれるものであるから、当然、公の統計数字にあらわれることは絶対がない。『日本残酷物語』平凡社、P. 211には、寛政5年、江戸本所両国の回向院境内に「すでに1万もほうむられた」とし、同書 p. 221には明治時代「公私の費用で養育されている全国の13才未満の捨て子」の判明している数をあげている。

明治20年	5,777人
25年	4,958
30年	3,740
35年	2,432

同書同ページは、東京市の養育院の年々の入院児数を次のように示している。

明治23年	222人
28年	104
33年	70
38年	262

われわれは、全国の捨て子数が明治35年まで一貫して減少しているのを見るが、この東京市の数字の中、明治38年（日露戦争）の数字の増加に着目しなければならない。

§2. 形 態

はじめの方ですでに「たんなる剰余物としての剰余生産物」にふれておいた。ここでもういちどその形態の問題に立ちかえる。人間たちは、生きていくために飲食、住（たとえ木の上であろうと、暗いホラ穴であろうと）、衣（獣皮であろうと、粗末な麻布であろうとまたは体自体への彩色であろうと）その他いくつかの必要をみたすためのものを作り出しつづけた。その生産活動のある時期から、最初は偶然に、そしてその後につづく

時代には恒常的に剰余物が手にはいるようになる。剰余物が剰余物として特別に作られたわけではないのだから、当然、すぐに消費してしまう分と全く同じ物として剰余物であったわけである。だから剰余物はやはり「その属性によって、何らかの種類の欲望をみたすところの、一つの外的対象すなわち物である」（マルクス）という、かの商品の最初の使用価値の規定を受けとっている。もちろん、それは剰余物のみが特にうけとったのではなく、人間たちが作り出す欲望の対象物は、有用性という点においてひとしく受けとるのである。だから、いかに剰余生産物のない例えば野蛮のそもそもの発端の時代ですら、人間がつくり出した物にはすでに、将来生産物が商品であるためにもたなければならないひとつの側面をもっていたわけである。人間が商品の生産を目的として物をつくり、作られた商品としての物が、自由に商品世界を歩きまわるためには、物はいまひとつの側面、価値の側面をもたなければならないのだが、とりあえずしばらくの間はこの有用性の側面、もしくは効用だけで存在をつづける。有用性と効用とはすこし内容のちがった言葉であるが、物の属性を客観的にとらえようとすれば有用性と表現し、主観的に、つまり人間の欲望との関連においてそれをとらえようとすれば効用 (utility) と表現することになる。野蛮人や未開人たちがひたいに汗して活動し、物を手に入れようとする場合の衝動は、もっぱら率直な欲望にもとづくのだから、有用性、よりも効用の方がいいように思われる。

さて、人間たちの生産物、したがって、未開時代になると恒常的に手にはいるようになった剰余生産物が、以上に分析したような属性をもつものとして、つまり人間の欲望と直接向き合った形で存在をつづけているうちに、原始的な氏族共同体どうしのあいだで、その剰余生産物の交換がはじまった、といわれている。ここですこしこの交換ということを見ておきたい。交換とは、広い意味では、生産の過程で（この生産は原始的意味もふくめてである）人間がその活動や能力を相互に補助しあい、その労働の成果を分かち合うことまでも意味している。人間の生産活動とは、このような形でのみ行われてき、現に行われている。『ドイツ・イデオロギー』の中

で、あらゆる人間存在の、したがってまたあらゆる歴史の4つの前提が考察され、その4つめに、「協働」(Zusammenwirken)つまり、「人間相互間の一つの唯物論的つながり」をとりあげ、次のようにのべている。「この協働様式はそれ自体、一つの生産力である……したがって人類の歴史はつねに工業（原始人が燧石を作る作業も工業である）および交換の歴史とのつながりのなかで研究され取り扱われねばならぬことになる」(真下訳, 国民文庫, 58, 傍点および()内筆者)

ここに書かれている「交換」がまさしく、いま述べた広い意味でのそれである。さきに、共同体社会の末期にあたって、交換が発生する、という周知の命題を出したが、これは、後続の古代奴隷制社会に発生する商品生産とのつながりにおいて、人間の生産物というきわめて限定された物の交換を、とりわけ社会的分業の発達と、交換の密度、その範囲、そのしかたを考慮に入れて立てられる命題なのである。広い意味での交換は、人間がそれなしには生産しえず、類として存続もしえなかったのだから、人類の歴史とともに古い。A. スミスが『国富論』第1章の分業論の冒頭に、分業は「人性の或る一傾向」「一物を他物と取引し、交易し、交換する人類自然の傾向」(竹内訳, 上, 19) から起り、その交換性向は利己心によって助長されると説くのであるが、多少唯物論者的な人は、ここで頭をひねって、「これはおかしい, Propensity などという主観的、観念的なものが、分業を起すのではなくて、分業の方が先にあって、交換の衝動をひきおこすのだ」と言うのであるが、残念ながら、それは限定された交換を、限定された分業体制の上で論じながら、それをあらゆる社会構成体における無規定的な交換ということと混同しているのである。もっとも、それは、資本制社会の入口の経済学者 A. スミス自身にも責任があるのだ。そしてこのような人類自然の一大傾向を説明するのに犬や兎の話を引き合いにだすから、誤解を招くのである。それはさておき、限定された意味での交換はいろいろあるが(たとえば、生産手段や消費手段の生産のための手段としての生産物交換, 商人どうしの交換, 最終的な消費のための交換など)すべて生産とのなんらかのかかわり合い、むしろ生産との相互作用の中での

み語られねばならない。つまり、限定された交換は、それぞれの時と所における生産の発展としくみとに規定されているのである。

原始共同体社会の中で発生し発展する交換というものは、したがって、やはりその社会の生産の程度と、しくみ、つまりは社会的分業体制のあり方に規定されるので、きわめて局限的で偶然的だったのである。

社会的分業体制の基盤は、定着労働＝生産産業＝剰余生産物の恒常的取得の上に、母系制を止揚して確立される家父長制氏族共同体である。それは、野蠻の時代に、生物的条件にもとづいて、自然発生的分業体制の上に成立した、共同体内の安定的な中心としての女性の地位が、定着労働への労働態様の変化がもたらす男性の共同体内定着、彼らの労働用具への肉体的習熟を軸として、共同体の生産手段したがってまた生産物とりわけ剰余生産物の管理者という、男性に与えられた生産体制内の地位によって没落していく過程でもある。女性の共同体内における地位の低下は、人類の悲劇のはじまりである。女性はこの時からたんに「他人の生の生産」の協働者としての地位にとどまり、彼女が、「他人の生」を生産しえないなら、余計であり無価値であるとみなされるようになる。それは、資本主義的生産において、「剰余労働を生産しないすべての必要労働は余計なものであり……ただ労働者を再生産するだけの、すなわち純生再物（剰余生産物）を生産しない、すべての総生産物は余計であり……また、生産のある発展段階では労働者たちが純生産物を生産するために必要だったとしても、もはや彼らを必要としない進歩した生産段階では、彼らは余計になる」（マルクス、資本論第1巻未定稿、直接的生産過程の諸結果、岡崎訳、国民文庫、128）のと全く同様である。

さて、生産手段や剰余物の管理は、男性に、とりわけ氏族共同体もしくはその統合としての種族共同体の統率者である族長に、ある異様な力を与える。その力を力として追認し、それを維持するために、共同体による剰余生産という基盤を反映してここに全体主義的イデオロギーが発達し、原始宗教が成立する。全体主義的イデオロギーは、協働という人間の唯物論的結合の強化のみが、剰余を生み、それが事実として共同体全員の利益

につながるが故に、その共通利益にむかって自我を抑圧することをうながす装置にほかならない。階級的搾取や支配は、なお生産力水準の低位のために発生しえなかったが、共同体の共同所有にもとづく「平等」も「原始的民主主義」も、全体主義的イデオロギーによってのみ維持される。個人的資質と個人的創造性は野蛮の時代に比してさえ、停滞する。これが人類の悲劇への序幕の第2である。

さて、発端における剰余物の交換は、それまでの自給自足経済とは異質のものであるが、それは、自己の共同体の剰余物を他のそれと交換することによって剰余物を直接の必要物にかえることであり、このことが共同体の必要をますます多様化し、豊かにしていく。だがその交換も、偶然性と局限性に左右される間は、生産物の直接交換方式すなわち物々交換の域を出ない。物と物との直接交換においても、必ずその交換の比率が問題となる。資本制社会における交換の尺度は、投下労働量にもとづく交換価値であり、生産物を、使用価値規定によってだけでなく価値規定によって、商品として措定することの必要はここにある。だがしかし、自己の自然的欲望をこえる剰余物が、偶然的な物々交換をとおして相互のより多様化した欲望を充足している時代においては、交換の尺度は、そのようなものではなく、人間欲望と直接にむきあった「効用が価値の真の尺度であった」（マルクス、経済学批判要綱、高木監訳、828）『要綱』は同じ場所で、「商業は物、富から効用性というその原始的な性格をうばった——それは使用価値と、商業がすべての物をそれに還元した交換価値との対立である」とのべているが、この商業の発端がいまわれわれの分析の対象である家父長制共同体のあいだで、もしくは、その内部でも、発生し発達していく剰余物の交換にほかならない。

§3. 展 開

以下、野蛮時代を S. P. 未開時代を B. P. と仮称する。S. P. と B. P. が人類の原始時代を構成する。原始時代に続く文明時代は、今日まで、いくつかの明確な社会構成体の変遷にもとづいて、社会史を綴る。だが、S.

P., B.P. は、そのような意味での社会構成体ではない。第1節において、S.P. と B.P. とを、剰余生産物の有無を指標として区分したが、それはいわば量的区分にすぎない。原始から文明への移行にあたっては、剰余生産物の重大な質的転化が認められる。だが、その点を無視しても、われわれは原始時代を古代奴隷制社会に先行する1つの社会構成体として措定しうる。そのばあいの規定はいうまでもなく、生産力と生産関係とを基軸とする社会発展の基本法則である。剰余生産物とは、生産力の結果であって、「人間の各歴史時代は、人間が何を生産するかによってではなく（つまり、生産結果の量や質ではなく）、人間と人間とがどのような社会関係を取り結びながら生産を営むかによって、区別されるからである」（横山正彦編、経済学概論、有斐閣、57、（ ）内筆者）だから、剰余生産物論は、科学的な厳密な社会発展の理論とはなりえないであろう。ここで、生産力、生産関係論（仮称）と、剰余生産物論との問題把握のしかたを例示するならば、たとえば、高度の電子技術まで動員して行われる日本の今日のカラーテレビの月産が労働者1人あたり、1970年に12台であったのが、1977年には62台になったとすれば、ひたすら生産性だけに関心をよせる人々は、あらゆる合理化や労働強度の増大を無視して、労働生産性が5倍になった、と行うことができるのである。だが、問題はたんに生産性だけにあるわけではない。合理化や強度の増大をふくめた5倍の生産性を可能にするのが、現代日本の生産関係であり、その生産関係はまた、そのような意味での生産性によって維持される、という相関こそ土台としての経済構造であり、この相関にこそ問題があるのだ、というのが、生産力・生産関係論の順序正しい理論である。それにたいし、剰余生産物論の視点は、その経済構造のあらわな恥部に非常に不作法にせまるのである。つまり、62台のカラーテレビのうち、剰余生産物は50台なのか、それとも60台なのか、というわけである。だが、ひょっとするとこれこそむしろ、「歴史時代の衰滅の契機」を探る視点ではなかろうか、と考えるのである。さて、もういちど原始時代にもどることにしよう。

S.P. の末期になると、少しずつ剰余生産物がでてきはじめる。しかし、

S.P. を S.P. たるしめる質は、剰余生産物がないということである。現実にそれが無いということから人類史がはじまったために、古代の哲学者たちが思考の展開を剰余生産物にあてはめるばあいも、やはり「無」から出発させざるをえなかったにちがいない。ところが、エレア学派の抽象的汎神論においては「無からはなにものも生じない」という命題が、極めて重視されたといわれる。文明時代の初期に属するパルメニデスが「あるものはあり、ないものはない」とし、真の實在の不変不動、連統一体を説いたのは、現にあるところの剰余物が、かつてはなかったのであり、それは再びなくなるかもしれない無常さを秘めていることにたいする、半原始人的なおそれではなかっただろうか？ 後代のキリスト教形而上学の、この命題にたいする非難は、全存在の「可能態」から「現勢態」への生成運動の法則と、その一切の運動の原因でありながら、全存在を超えて神として定立される純粹形相の不変不動性を説くアリストテレスの理論が、全盛期のスコラ哲学において、「万物は被造物として発展段階をなし、その極致は神である。従って、それを認識することは神の栄光を傷つけるものではなく、却って高揚するものである」（武市、山本編、哲学原論、79）として受けつがれ開花したとき、もはやパルメニデスのおそれは消え失せ、現存在にたいする満々たる自信にもとずいてなされたものであろう。

さて、剰余物概念は、S.P. におけるその無にはじまり、無が S.P. の質を規定すると同時に、その反対物である（剰余物の）有を向他有（それ自身の中でみられる他の物という面）として自分自身のうちに措定する、という風に、ヘーゲルとは逆の方向に展開されていく。

S.P. にとっては、剰余物の無こそ、存在する規定性でありその質なのである。そして、「或る物は、その質の点で他の物に対立するのであり、その点で変化するものであり、有限的である」（武市訳、ヘーゲル全集 6a, 大論理学, 岩波, 117, 以下ヘーゲル）或る物（= S.P.）が、有限的であるということ、S.P. の有限性とは、まず、S.P. がその向他有に対立するものとして即自的にあるが、しかし規定性は S.P. 本来の即自性つまり剰余物のないことであるから、そのことが S.P. の規定である。この

規定、つまり S.P. の使命、本分はたえず内在的で同時に否定された向他有に推移しようとする、この S.P. がもつ他の物たとえば B.P. と対立する面が、実は S.P. の限界をかたちづくる。しかもこの限界は、S.P. 自身の内在的規定でもあるから、S.P. は有限的であるもの、有限者である、という意味である。

さて、有限的な S.P. に対立するものとしてあらわれるその否定は、一般的に言って無限なものだが、この有限性と無限性との最初の対立は、ひとまず、対立のない無限性の中に消える。これがヘーゲルの云う「向自有」(つまり、他の物との関係において目ざめた或る物) である。

たとえば、価値である貨幣との関係におかれた、使用価値としての商品が、この向自有 (= 対自存在) である。⁽⁹⁾

「或る物の質はその限界であって、この限界をもつものとして、まず最初は、肯定的な静止的な定有(規定された有)であるにすぎない」(ヘーゲル、148、傍点と()は筆者) ここで言われる、まず最初の肯定的な静止的な定有とは、あらわれた最初の否定である無限性との対立を、無限性の中に解消したところの、S.P. であり、端的な表現をすれば原始時代から最後の B.P. 分をさしひいた199万年⁽¹⁰⁾ (発展史、43) の S.P. である。

しかし、この否定はさらに発展して、S.P. の定有とその定有に内在的な限界である否定との対立がはじまり、それ自身が S.P. の自己内有となる。(自己内有とは、否定を自らの規定としてとりこみながら、再び即自にかえること) この否定面がまた S.P. の有限性なのだが、これはさきにもべた内在的規定としての有限性の発展であり、「こうして自分の内在的な限界をもつものとしての或る物 (= S.P.) が自己矛盾として措定され、この矛盾のために或る物が自分を越え出ようとすることになり、それに駆りたてられるものとなるとき、或る物はいまや有限的なものである」(ヘーゲル、148、() 筆者)

それでは、有限性はいかにして越えられるのか? ヘーゲルは、「有限的な或る物」の概念のなかに、2つの契機を見いだす。「制限」(Schranke)⁽¹¹⁾

と「当為」(Sollen) とである。

「或る物自身の限界⁽¹¹⁾ が或る物の否定者であると同時に、その本質的なものであるということになると、それはもはや単に限界そのものではなくて、むしろ制限となる」(ヘーゲル, 152, 153) この文の前段は、否定の発展によるその自己内化のことである。

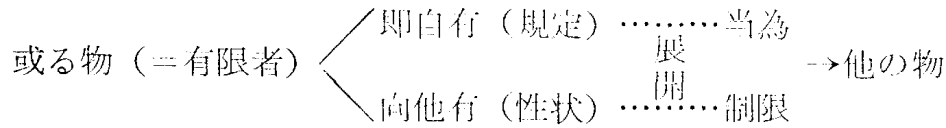
しかし、これだけでは、ただ通過しうる門がひらかれたにすぎない。或る物の中の他の物の面＝向自有が、上述のような制限となりその物自身の規定となるにつれて、有限者は本来の規定よりも、その否定面の規定をより強くうける。その結果、本性＝即自有もまた「制限」となってしまうのだが、しかしそのまま流されてはいない。本来の規定（そのものをそのものたらしめる質）は、流されそうになった制限としての即自有にたいして、「当為」として対立する。この制限と当為の二契機は、本稿のもっとも核心となる点であるから、もっと具体的に言いかえてみよう。ついでに、「限界」と「制限」の意味も注の11でもいちどたしかめてほしい。

本来、「剰余物がない」ことを質としている S.P. が、「剰余物がある」という否定との矛盾をとおして、限界としての「ある」ことを、むしろ自分の本質としてとりこみはじめ、そうすることによって限界を自分を越え出ることのできる「制限」にかえていく。(少しずつ剰余物が生れはじめることを考えればよい) それと同時に、「ない」という本来自分の使命であった即自的な規定が、ややもすると犯されそうになるので、「制限」に対立するものとして「当為」にかわり、こうして、S.P. は乗り越えられて B.P. へと移っていく。

「或る物が一般にもつ限界が制限であるためには、或る物が同時に自分自身の中でこの限界を超えて、しかも自分自身の中で非存在としての限界(限界ではなくなる限界)に関係することにならなければならない。或る物の定有は静止的に無関係に、云わばその限界と並んで存在している。(199万年もだ) しかし、或る物が限界を止揚したものとなり、限界に対して否定的な即自有となるかぎりでのみ、(流された即自有がふみとどまって、「当為」としてそれに対抗すること) 或る物はこの限界を超えるので

ある」(ヘーゲル, 153, () 筆者)

さて, われわれは



という分析から, 剰余生産物のもつ重要な役割を見いだすことができる。剰余物がひとつの時代の衰滅の契機となるということである。

ヘーゲルは言う「有限的な物は存在するが, しかしその有限的なものの自分自身への関係とは, 否定的に自分自身に関係するということ, 即ちまさにこの自分自身への関係の中で, 自分の存在を越え出るといふことにほかならない。有限的な物は存在するが, この存在の真理はその物の終りということである。有限的なものは或る物一般のように単に変化するといふだけではなくて, むしろ滅びるのである。……有限的な物の存在そのものが滅亡の萌芽を自分の自己内蔵としてもつものにほかならない。即ちその生誕の時はその死の時なのである」(ヘーゲル, 148, 149)

「剰余物の無」を質とする S.P. が, 「その有」に憧れながら積み重ねた「底抜けの廣大無辺な」歴史は, その憧れが叶えられたときに終末を迎える。われわれは, その壮大な終末に, 紀元前約1万年からはじまる農耕時代のうち, 紀元前29世紀のエジプト第1ティニス王朝の創設(年表世界史 I, 白水社, 文庫クセジュ)までの約数千年をおくろう。だが, この数千年は原始から文明への過渡期にすぎない。

この時から, 剰余生産物は存在し, 存在しつづけ, そして今, かぎりなく存在するが, 同時に存在しない。搾取と収奪の果実としてはかぎりなくあり, 搾取され収奪され, 「空」にされた結果としてはない。

9 商品の分析において, 最初に出てくる価値と使用価値との統一としての商品は即自有であり, 向他有とは価値形態の第1から第3形態までに右辺にあらわれる等価形態に立つ商品である。すなわち, 即自的には使用価値としてありながら, その中に価値という他のものの面をそなえもつ形である。

10 人類の歴史は, 歴史家によってさまざまである。ここに用いたのは『発展史』その他の200万年説, B. P. 5, 000年, 古代奴隷制以後を5, 000年として199万年

である。モーガンの10万年，その他55万年，『発展史』のいう，オーストラロピテクスなる猿人は多分，第3紀のなかば頃だろうから，新生代400万年説にもとづく200万年であろうと思われる。もし，新生代4,000万年説によれば，当然人類史2,000万年説もありうるのではないか，**Let that go!**

- 11 **Schranke** とは，**barrier, gate, turnpike, toll-gate** のことで，本来，通過しうるものである。（もっとも **Kafka** の錠の門みたいな門もあるが……）これに対して「限界」(**Grenze**)とは，**boundary, frontier, border, confine, extremity, edge, verge** で，ゆきづまり，どんづまり，もうそこから先へは行けない先端のことである。

〔§3のための試論〕 (cf, 注. 9, 注. 11)

生産物が，商品になる過程を，概念の自己運動としてあらわしてみよう。この過程は，本説でもふれたように，おそらく原始共同体末期から，貨幣の出現，さらに商品流通がかなりの規模で恒常化するまでの（大体中世の中期）歴史があるのだが，ここではそれは一切捨象される。

まず生産物からはじめよう。

商品でない生産物，つまり純粹生産物とでも言っておこう。

それはただ使用対象であり，本文にも出てきたもので，有用性・効用性によって規定されているにすぎない。だから，その内部におこる矛盾はただそれが「ある」ということにたいする「ない」ということだけである。この「ある」「ない」は，効用性の有無ではない，なぜなら，効用性のないものは，そもそも生産されないからだ。本文で剰余物に関して論じたのはこの「ある」「なし」だった。

さて，このような純粹生産物がひとたび交換されるようになると，こんどは「ある」「なし」の規定は消滅して，効用性の方が歩み出てくる。なぜなら，交換は必ず「ある」ことを前提とするからである。ここでの生産物の内部におこる必然的な矛盾は，「効用性」にたいする「交換性」ということである。

「効用性」にたいして，なぜ「交換性」が矛盾ないし否定としてあらわれるかといえは，「効用性」を享受するために，「交換性」がつねに障害となる，からである。それはたとえば，生産物が少なすぎるとか，物々交換の場合には，双方の欲する「効用性」の偶然の満足という条件に左右

されるとか、であり、「交換性」がしばしば乗り越え難い障壁となる。

こうして「交換性」は *Grenze* となる。

なんとかしてこの *Grenze* はうち破られなければならない。その方法が考えだされる。生産物が、いちど他の生産物に姿をかえるという方法である。家畜、塩、貝殻、干鱈、煙草、砂糖、獣皮、製革、釘、(国富論)などに、である。もちろん、ひとつの時代、ひとつの地域では、これらのどれかひとつがえらばれるだろう。

これが、自分を超越することによって「限界」を「制限」にかえる、ということである。

さて、こうして「交換性」が「制限」にかわって、やや乗り越えられるようになると、本来、その生産物の最も重要な要素であった「効用性」そのものも、交換ということのためには、その絶対的地位をすべり落ちて、一種の「制限」にすらなってしまう。そこで「効用性」はビックリ仰天して、品質を高めたり、見た目をよくしたり、使いやすくしたりすることによって、「効用性」を目指して交換を求めさせるように努力する。

「効用性」が、自分自身の「制限」化に抵抗して自分を「当為」とするというのはこのことである。

そして、そのことはますますその生産物が他の生産物と交換されることを促進する。

Sollen と *Schranke* が、有限なる物——「交換性」という限界によって有限的となった生産物——が、自分を越えて出ていく重要な契機となるのである。

マルクスは、この「効用性」を使用価値側面、「交換性」を価値側面として、商品はかならずこの2つの側面をもつ、とした。たしかに、抽象的に商品というものを考えるとそのとおりである。試論のこれまでの分析でそれは証明されている。ところが、現実の商品は決してこの2つの側面を目に見える形でもっているわけではない。目に見え、触れることのできるのは、「効用性」「有用性」つまり使用価値側面であり、それ

は生産物の自然的側面であり、その社会的側面である「交換性」、価値側面ではない。しかも、2側面があることは事実なのだ。

この両側面の統一されたものとして肯定的に静止的に理解される商品は「即自的」商品＝即自有であるといい、現実には、「効用性」を一手にひきうける一般商品と、「交換性」を一手にひきうける貨幣とが、むき合っている場合、この商品を「向自有」というのである。だから「向自有」とは、「効用性」と「交換性」がはっきり分離し、対応した形、といえる。

ここで貨幣について付言すれば、さきに、「限界」を「制限」とする方法として、一旦、塩や獣皮などに姿をかえる、といったが、この塩や貝殻や獣皮などが、のちに「貨幣」という専門的な交換の媒介物としての商品になるのだ。貨幣の発生によって「交換性」のもつ制限性はますます小さくなっていき、商品流通はますます円滑になっていく。（実はこのことが、もういっぼうの「効用性」のみを重視する『効用価値説』の発生につながっていくのである。）それはそれとして、制限性の打破は、商品世界の中で、貨幣のみが直接的交換可能性をもつただひとつの商品となることによってはじめて可能となるのである。

即自有から向自有への推移は、商品の最初の否定である。この否定は否定される。それは商品と貨幣が交換されること、つまり商品が売買されることであり、向自有において分裂した「効用性」と「交換性」が、ここで現実的に再統一される。

（この試論は、内容的には直接本稿とあまり関係はないが、§3の理論構成にあたって、商品の分析を、ヘーゲルの『論理学』に展開されている「限界」「制限」の理論によって行ってみた、かつての試みを基礎にしたので、とくに学生諸君への手引きのつもりで、「試論」としてつけ加えた。本稿§2と併せ読めば、たとえば、「効用価値説」の源流を把握できるだろう。）